

授業者あとがき

長崎のオランダ坂にある童話館という本屋から、我が家に毎月2冊絵本が届けられる。もうかれこれ7～8年になるので、150冊は超えているだろう。送られてくる絵本の多くはとても自分では選ばないような地味な本が多いのだが、さすが専門家による選書だからだろうが、子どもたちは確実にハマる。エリック＝カール作品（『はらぺこあおむし』『パパ、お月さまとって』）のような斬新な色遣いでもない絵本（たとえば、林明子『はじめてのキャンプ』、マレーク・ベロニカ文／絵・とくながやすもと訳『ラチとらいおん』、加古里子『だるまちゃんどてんぐちゃん』、マリサビーナ・ルッツ絵／文・青木久子訳『ぎょうれつ ぎょうれつ』等）に4歳違いの3人の息子たちがその時期になるといずれも確実に食いついていくさまが不思議であった。

こうした子どもの心をわしづかみするような絵本の魅力の源泉は一体どこにあるのだろうかということを読み聞かせをしながら夜な夜な考えてきた。その秘密は絵にあるのか、韻を踏んだようなことばのリズム感にあるのか、それとも子どもたちでも先が予想できるくり返し（リフレイン）にあるのか。（そこで初回シラバスに「ぐりとぐらはなぜ子どもたちの心をつかむのか」と記した。（参照『ぼくらのなまえはぐりとぐら—絵本「ぐりとぐら」のすべて』福音館書店、2001年）。

たしかに考えてみれば、私も幼少期に読んでいた世界名作シリーズの中で印象に残っている本の挿し絵は（中学生の頃になって気づいたが）きまっていわさきちひろの作品だったし、我が家の次男・りくのお気に入りの2冊（『ロバのシルベスターとまほうのこいし』・『歯いしゃのチュー先生』）は（これも最近になってマーブルブックス編『絵本と絵本作家を知るための本』2006年、中央公論新社刊、を讀んでいて気づいたが）いずれもウィリアム・スタイグの作品である。絵の雰囲気や作品の世界観との相性みたいなものがあるのだろうが、そのような作品が醸し出す空気は一体どのような要素から構成されているのだろうか（仮説1）。

また、絵本は子どもが一人で黙って読むためのものではなく、大人が子ど

もをまるごと包み込みながら声に出して読んでやるものだという話も聞く。もしそうだとすれば、リズム感は絵本の生命かもしれない。シビル・ウェッタシンハ作・まつおかきょうこ訳『きつねのホイティ』、ロシア民話・せだていじ訳『おだんごパン』、ジョン・バーノン・ロード文／絵・安西徹雄訳『ジャイアント・ジャム・サンド』等の作品は読んでいて小気味よいし、聞いていてもわくわくする。こうしたリズム感も翻訳次第でずいぶん印象がかわるだろうから、絵本と言えども外国作品ではとりわけ訳者の左右する部分は大きいだろう（仮説2）。

さらに、大人目線と子ども目線との最大の違いと思われるのが、大人なら飽きてしまうような知っている話を子どもは何度も何度も聞きたがることである。読む側の立場としてはいささか辟易するほどの言い回しやストーリーの繰り返し（たとえば、マイケル・ローゼン再話・山口文生訳『きょうはみんなでクマがりだ』、ドロシー・マリノ文／絵・石井桃子訳『くんちゃんのだいらょこう』、白ロシア民話『ガラスめだまときんのつののヤギ』）も、どうも子どもには面白いらしい（仮説3）。なぜか三男坊が成功する「三人話」（トルストイ『3びきのくま』や『3匹のこぶた』）やいちばん小さな動物としてのネズミが活躍する『おおきなかぶ』やミヤエル・グレイニエク作『お月さまってどんなあじ?』などの基本もそうしたくり返しである。

しかし、絵本の魅力（の秘密）はどうもこの3つだけではなさそうである。そこで今回は教育学「文献」講読として絵本を読み解いていくことにより、かねてよりの私の疑問を学生達と一緒に解決するという身勝手な演習に挑戦した。個人的な問題関心の押しつけになりそうで最後まで躊躇したが、開講直前の春休みに踏ん切りをつけるきっかけを与えてくれたのは本学部卒業生である檜崎尚弘君との再会であった。立ち話の中で、彼が絵本カーニバルの活動に参加しており、これを主催する九州大学ユーザーサイエンス機構（USI）の子どもプロジェクトでは巨額の予算で膨大な冊数の絵本を収集しているという話を聞いたからである。

絵本は案外と高価なので私の少ない研究費で揃えるには限界があることは気がかりであったし、色彩論はもとより文学論にも明るくない私のもとの絵

本の静態的な分析だけでは不十分であろうから、絵本を媒介に例えば親子がどのような関わりをもつかといった動態的な分析が必要であろうことも痛感していた。4月に入って、早速、U S I 特任教授の目黒実氏とお会いし、受講学生が自由に閲覧できるようご協力いただくことができたことは幸甚であった。記して感謝申し上げたい。

そして何より檜崎君が毎回の授業に積極的に参加してくれたおかげで、例えばトミー・ウンゲラー『ゼラルダと人喰い鬼』の最後のシーンのエピソードやエッソ『もりのなか』のうさぎが何のメタファーなのかなど、深い絵本論を拝聴することができたし、実際にワークショップとして絵本づくりに取りかかるときの準備なども献身的に手伝ってくれた。本当に感謝している。

講義概要は本報告書の冒頭で示したとおりで、T A の山下顕史君によるまとめも参照されたいが、まず最初に複数の絵本を上記U S I の蔵書や公立図書館で片っ端から読むノルマを課し、そこから各人が上記のような仮説をいくつかみつける作業から始めていった。

次に読むばかりではなく描く側の視点を得るために、実際に絵本をつくる作業をおこなった。お題は「ライフ・イズ・ぶー！ティフル！！」である。例えば、土方久功『ぶたぶたくんのおかいもの』やアーノルド・ローベル絵・三木卓訳『しりたがりのこぶたくん』など、ブタが主人公の絵本は決して少なくはない。だが、一般には忌み嫌われたり揶揄されがちなブタを主人公に「人生ってすばらしい！」とのメッセージが込められた作品という具合にテーマを限定させた。しかも2人ペアによる協働体制でつくるという条件も提示した。この難題に挑み、期待以上に応えてくれたのが、本報告書前半の作品群である。どれも力作揃いである。ぜひご高覧いただきたい。

こうした作業を踏まえると絵本へのまなざしが複眼的になっていった。そこで再度、絵本研究の第一歩としての仮説の発見とその実証の方法論を議論し、個人研究課題にシフトした。そうしてまとめたものが後半の研究レポートである。各自のワークシートの仮説と対応させながら見ていただきたい。いずれも豊富な絵本体験をもとに実証的に取り組み、ファイルデータとして

提出してくれたものを集成したものが後半部である。しかしながら、編集方法の統一を指示しておらず、これを取り纏める作業は並大抵ではなかったようである。それを献身的にまとめ直してくれたのがT A（ティーチング・アシスタント）の山下顕史君であった。記して感謝申し上げたい。

最後になったが、ハードな私の授業に手を抜かず最後までつきあってくれ、力作揃いの成果を提出してくれた受講生たちとともにこの報告書が完成したことを一緒によろこびたいと思う。

2007年5月 こどもの日に

元 兼 正 浩